



今昔
談
唐
類
西



13
1616
2



門へ13
1610
2



今古小説唐錦卷之二

佐々木曹五茶師紹芳を討話

世事終く如奕棋輸贏夢幻巧難窺但存方寸公平理
 恩然分明不用疑恩と須臾も忘るる者忠臣孝子恩
 幸ふ忘る者乱臣賊子なとべんと悔と倉歎とるハ
 は二つふよるの天文の以泉別堀のはふ佐々木曹五と云
 者あり世々素封めて貴財倉庫ふらつたれは夜合の
 兵とまらち婢僕のみさふつとて自れ家産と受まらぬ
 書と讀酒と樂とあふ持人出民と吏者修風流母
 目と送るれた仁心うく使宰りるそ食と地と紙と
 巻と好むる多うふ細川常植ふ仕人一衆は音次



とふは人の有り自ら成る熟練一書に明かりと
自負と人をも主人立地の我いことばに
落ておれ余を保じて死と志と名とけり
飄泊し凍餒の辛苦ふらうと
佐未費ふとお徹ふらうと
の乱れ福籍とせせんとも
奥のいさせんともいふ
痛むとて世は希なる
ちあははくう一人の
さしと終致して別
とて世は希なる
ちあははくう一人の
さしと終致して別

詞の似と味練めて後と費共
情の始ふらうと終
かろうれと病く思ひ
は救はれ方ありて
めとらなうけし
終は某人をぬて
付て大名の家め
招きそ紹周用
の大名もべり
より紹芳も信
詞の似と味練めて後と費共
情の始ふらうと終
かろうれと病く思ひ
は救はれ方ありて
めとらなうけし
終は某人をぬて
付て大名の家め
招きそ紹周用
の大名もべり
より紹芳も信



旅亭にいと結芳がりと見る不縁貴人に夜更けに
より長久し先切の定りて宿所告り案内とあるに
僕をして何れもやらぬふちりて寝ておぼやか
館よりありしゆりおぼく寝たりゆりて待命しん
とかくしは猶もその白くはよぶるもむかへたる縁となま
らるる〜に〆つ〜 庭蓮清幽うて奥は男
女の若るおぼやの〜 僕るあら〜と〜
〜 阿も思ひぬておぼる御より主命の縁くかきさる
〜 〆〜
〜 〆〜
この結芳は貴人としてしは案ふ侍り〜
僕も池までてゆるある門ふ〜 〆〜 〆〜
おれ僕もてか〜

昔はばら佐木氏の縁も若を縁とほらふ能くその
おぼして自らしておぼして奥の縁〜 〆〜
も縁僕も〜 〆〜 〆〜
〆〜 〆〜
内縁うて曹又の簿命又窮のは〜 〆〜
今官途より〜 〆〜
縁も〜 〆〜
縁も〜 〆〜
縁も〜 〆〜
縁も〜 〆〜

事りて難き程にぞと後事に向ひしと昔も始のそと
 けりしを似せぬもやとぞと又も人集まんのいつて門も
 送るべ奥に入らば曹又いんふふとまの幸いなる一筆
 とまの口は合へる命と奪奪とる如く同業をやと
 旅亭に向ひてお別てりしをかくとまの報日け旅亭とて
 ぞあふふおん昔月の思と露やとと思するは涙の憂
 と許りの財とをいづる礼とあつとあつとあつと人
 黙と獨り雲うがもこの中にてお後とまのいよ
 りあつとむいお音おとあけはせは僕を主人の早
 子ありしとむしとるよ冷ゆる門とあつとまの
 とらうちお紹もるるはまのくく死業の装ひめく

僕と後意氣揚とて門とあつと出はるる体とるる曹五の怒
 守あび起りまうまて雲うおとあつとあつとあつとあつと
 不ふらて對候すると能くふらしてあつとあつとあつとあつと
 と又思ひ入して怒とあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 不幸れ思ひはほと望日の曉とあつとあつとあつとあつとあつと
 けよの心とあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 差支へ後よ僕と伺とかいふとあつとあつとあつとあつとあつと
 ともだの家も今もあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 もあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 僕ふらとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
 ざらとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

曹史と云ふも詞に於ては、
あやと妻の恙かたやる色は、
字の傷やすくひをたけは、
要人漸く懐とあへ病中は、
骸と葬りて重て、
あつたのりくや、
うづうさう角中、
いかに妻の事をも、

曹史と云ふも詞に於ては、
あやと妻の恙かたやる色は、
字の傷やすくひをたけは、
要人漸く懐とあへ病中は、
骸と葬りて重て、
あつたのりくや、
うづうさう角中、
いかに妻の事をも、

ゆりや刀と帯をびてあふまばいとおびて飛と附目をすこ
くも膽落魂飛て怒りどつらひりぬく裏と一討と思ひも
苦痛とささくさひあせん先衣の統とお落しは
あつと呻んで迎ひんをさる要人引かしてお例を起して
又迎んとする附たの統と切落さるしはさるあさる苦
うめえ猪まらうろとんくまは油背の膏懐一内お
熱くと冷水と飲めく掬使は情と久く言とに二氣と
始て汗けり将あつて紹芳は將お息返るく久を
お人頭と御とを持てやのあつてけ裏石激と怪言
間屋の扱おもまば粉輝とあてあつてらる曹又おひり
もましく紹芳と害しはまばあつてもまは死骸と假し

ひめあつと華流いすくおとゆりうく葬りて分るは
ともせむやと要人ともまはゆ界へゆりうりゆりお如く
ともましくおさそく舊史と棄るゆの世稀まどあ、
とまめふるんや

桂隼人寛と意と回息と被る話

桂隼人ある者へ毛利之統の后桂能登吉之統乃一族なり
よえ統元子晴久と合戦乃討援馳し能助と討死し
軍令不肖飛ゆゆらぶ助定と意の所ふ流落し細柳と
おつて久し曹史がえふあつては吉不消て桂能心さ
よ君の代承しとふあひお地と悔く主人の助死とあつ
まんとはゆり軽くまは能心も軍切と取しして起る



一層金

帝のまを思へく興るる者ぞとれを以て曹史は僕らに
 着いたとて大に驚きたりしとて俄にける福甚ふゆや
 あやとて月よ入て要人とんを遣はさしりて之を
 辱すのふ蓋すも好しや要人先んこめてを不招ト
 くれを早に決する事とて家僕の面らつて能てやこ
 もとてかきとてつめく海軍してとらざる方をも忠ん切
 かり要人の事だる人もしくも老弱の漢事とてわらわら
 彼も同じ古来のものやとて彼をよせまらざり周陽ふ
 て那をせしりし不幸なる始り終りとあはれむべき事自れ
 とらざるまば甚ふ力と海軍とて終る主人と女抱せんを
 ころしたるんやとてしむる者もしくもとらざる事とて

詞をききて要人再之理を説きしは中道もたはるる忽ち
 あらも一旦主人と作せしむる事とて我とてはるるあ
 かりも思ふ事とてあしむる事とて後世を皆く難報に
 能ててかきとて有れ身とて終る事とてこれ終れとて
 じむるの河と昔さんよりつめきて再びあつたりし
 とも要人も怒りた事とて世中人高きまはせしりしと
 してはるるは詞ふしむる事とてあけて我とてはるる
 もよりしはるる事とてあつたりしとてはるる要人
 よし出づ積籍者よりしてなりとてあつたりしとて
 と難ひかきとて主人のゆるとはるる事とてあつたり
 之免しむる事とてあつたりしとてはるる事とてあつたり

ふと驚くば主人の怒りとなり病の清りにさるんとす
と語つてあるより一日曹五が病と為りしありし僕後
くは威儀清くしてさ涼ら破屋のわきて馬より
自ら曹内と語りし曹五は後より人々研く病牀と遠
くく然るをさば桂舟人よりけさ物をも清く石無事
してわらうに要人も多と書きたりてわらうはるる
舟人いおの病牀のわらうん知つたさば詞とわらう
しく石無事なりし教をもさすせどわらうんをさし
拾遺蹟あるべし僕とをさけ揚り要人は新て我あ年
流落の内建と語つて之より富者なり謝辭とのべん
主君は代りして信吉の作は清く序をさるる

とも曹五はゆふ何れもい恨ばさす交つて詞とわ
るは前も因防大月の加勢ふすりて市中圖らばも
をさすも今日如くみて避隠さるるに西ふ海の内
若らうと怒つての折はさるる信吉を二門の者ふ
やまざらうらさるるひてあく物取口とさすい
こまははひりしに介に恨むと信吉はさるる
とあつたさるる病の回復さるるは要人もねは
能くさるるさるるやと始て分お年君のゆりし
庫中にありし二箱の黄金をさるるは病をさるる
作もさるる病の婢僕とさるるさるるさるる
さるるに後さるる者君はさるる金庫のさるる
能くさるる

